

潜在危険性

健康

- ・ 毒性。吸入すると致命傷となる恐れがある。
- ・ 蒸気は刺激性と腐食性が極めて強い。
- ・ ガスや液化ガスに接触すると、火傷、外傷及び／又は凍傷を起こすおそれがある。
- ・ 火災によって刺激性、腐食性及び／又は毒性のガスを発生するおそれがある。
- ・ 消火水が汚染を引き起こすおそれがある。

火災・爆発

- ・ 燃えるものもあるが、容易には発火しない。
- ・ 液化ガスからの蒸気は、はじめは空気より重く、地表に沿って拡がる。
- ・ 水と激しく反応するおそれがあるものもある。
- ・ 加熱すると容器が爆発するおそれがある。
- ・ 破裂したボンベが飛翔するおそれがある。

公共の安全

- ・ まず、送り状記載の応急措置照会先に電話する。送り状がない場合や応答がない場合、関連機関のデータベース等に照会する。
- ・ 直ちに、すべての方向に適切な距離を漏洩区域として隔離する。
- ・ 関係者以外は近づけない。
- ・ 風上に留まる。
- ・ 多くのガスは空気より重く、地面に沿って拡がり、低い、あるいは密閉された場所（下水道、地階、タンク）にたまる。
- ・ 低地から離れる。
- ・ 密閉された場所に入る前に換気する。

保護具

- ・ 空気呼吸器（SCBA）を着用する。
- ・ 製造者により特に推奨された化学用保護衣を着用する（耐熱性がないおそれがある）。
- ・ 防火服は火災時に限られた防護をするに過ぎず、漏洩時に効果はない。

避難

大量漏洩時

- ・ 風下に適切な避難距離をとる。

火災時

- ・ タンク、貨車あるいはタンク車が火災に巻き込まれた場合は、すべての方向に、適切な隔離距離と適切な初期避難距離をとる。

緊急時の措置

火災時

小火災

- ・ 粉末消火器を用いて初期消火に努める。この際防毒マスク等を使用する。
- ・ 粉末消火剤、二酸化炭素を使う。

大火災

- ・ 散水、水噴霧又は一般の泡消火剤を用いる。
- ・ 危険でなければ、容器を火災区域から移動する。
- ・ 容器内に水を入れてはいけない。
- ・ 損傷したボンベは専門家だけが扱うべきである。

タンク火災

- ・ 可能な限り遠くから、無人ホース保持具やモニター付きノズルを用いて消火する。
- ・ 消火後も大量の水を用いて十分に容器を冷却する。
- ・ 漏洩源や安全装置に直接水をかけてはいけない；凍るおそれがある。
- ・ 安全弁から音が発生したり、タンクが変色したときは直ちに避難する。
- ・ 火災に巻き込まれたタンクから常に離れる。

漏洩時

- ・ 漏洩しても火災が発生していない場合、密閉性が高い不浸透性の保護衣を着用する。
- ・ こぼれた物に触れたり、その中を通ったりしない。
- ・ 危険でなければ漏れを止める。
- ・ 可能ならば、漏洩している容器を回転させ、液体でなく気体が放出するように処置をする。
- ・ 排水溝、下水溝、地下室、あるいは閉鎖場所への流入を防ぐ。
- ・ 漏洩物又は漏洩源に直接水をかけない。
- ・ 蒸発を抑え、蒸気の拡散を防ぐために散水する。
- ・ ガスが拡散するまでその区域は立入禁止とする。

応急手当

- ・ 被災者を新鮮な空気のある場所に移す。 ・ 救急車を呼ぶ。
- ・ 呼吸が停止している時は人工呼吸を行う。
- ・ 被災者が（有害）物質を飲み込んだり、吸入したときは口対口法を用いてはいけない；逆流防止のバルブがついたポケットマスクや他の適当な医療用呼吸器を用いて人工呼吸を行う。
- ・ 呼吸困難の時は酸素吸入を行う。
- ・ 汚染された衣服や靴を脱がせ、隔離する。
- ・ 液化ガスに触れたときは微温湯で白くなった部位を和らげる。
- ・ 漏洩物に触れたときは、直ちに流水で皮膚あるいは目を最低15 [20] 分間洗浄する。
- ・ 被災者を温め、安静にする。 ・ 被災者の観察を続ける。
- ・ 接触あるいは吸入の影響が遅効性であるおそれがある。
- ・ 医師に暴露物質名、防護のための注意を通知する。